

南方（スマトラ）

南方戦線従軍記

—水、水、水が欲しい—

愛媛県 越智隆綱

中支で戦死した。

私の家は越智五右衛門より数えて十二代目、私は定一の次男として徴兵になるまで農業に励みました。父は日露戦争で騎兵として満州で戦い、その武勇談をよく話してくれました。兄は先述の通りソ満国境で現役兵として御奉公中でした。

私は越智隆綱です。大正十（一九二二）年十一月九日、愛媛県北宇和郡津島町で生まれました。家の職業は農業です。当時の家族は、
父・母 共に健在
兄 ソ満国境で警備（現役兵）

姉二人 ともに他家へ嫁入り

本人 農業手伝い

弟二人 ともに学生、健在、その内三男の弟は

一期の教育検閲が終了後、中隊長命令により南京の下士官候補者隊へ入隊しました。同部隊卒業後、航空隊へ転科のため内地に帰りました。そし

て青森県の八戸航空教育隊へ入隊後、水戸陸軍航空通信学校へ入校しました。

卒業後の昭和十九年四月、新しく編成された第○航空情報部隊に配属され、平山隊の分隊長となり、南方の北スマトラ防衛のため内地出發、シンガポールへと向かいました。途中バシー海峡で魚雷攻撃を受けました。九死に一生をえてマニラを経て約一カ月でシンガポールへ到着できたのです。

バシー海峡は当時「魔の海峡」と言われ、米潜水艦などの攻撃による沈没の被害甚大の海域でした。私の乗船は三井物産の新造船で、船内には船首と中央部と船尾の部分に区切りの壁があった由です。魚雷は船首部分に当たりました。時刻は午前二時頃でしょうか。大きなショックを受けまして、「やられた！ 早よ甲板へ出よ！」と、階段の方へ皆殺到して混乱し、甲板の方へ出られない。

乗船の前後より中隊長殿より「決して死ぬな。

生きて生き抜け」と訓示されていました。私は船尾の上から三段目の棚におりました。魚雷命中で大騒ぎとなりましたが、船首は浸水して船は船首より棒立ちになり、私のおる船尾は空中高く上がり、スクリューを空回りさせている。海上は小規模の火災が数箇所発生しましたが、間もなく鎮火しました。その内に味方の駆逐艦が救助に来てくれて助かったのです。これが緒戦の洗礼でした。シンガポールでは二週間滞在しました。

次にマライ半島のポトヤッテンハム港より小型船でスマトラ島に上陸しました。目的地ゲバンでは部隊長、スマトラ防衛司令官等が、我々の到着を今やおそしと待っていてくれており、喜んで迎えてくれました。

スマトラ島は赤道直下で昼間は四五度と気温が高い。広さは日本内地の三倍、人口は四国程といえます。ただもう密林とゴム林ばかりが目につきました。ゲバンへ着いた。ここはオランダのゴム

集積所で、大きな建物があり、現地人が草刈り等をしている。片言のマライ語で話すとは何か通じました。

休む暇もなく室内の造作、整理、その他の生活準備に忙しく働きました。私の分隊は直ちに北スマトラ防衛作戦に従事することになりました。また大きな釜でコーヒーは飲み放題です。現地人は当地はスマトラ虎がいるので、我々に注意するよう、またトカゲ、サソリ、毒ヘビ、サルとあらゆる動物が沢山いるので一人歩きはできないといいます。

上陸して一カ月位で雨季に入りました。今から南方特有のマラリア病との戦いが始まるのです。私の分隊はインド洋方面のタバクトマンという小さい集落へ移動することになりました。いわゆるスマトラ島横断作戦であります。

この地の人はマチエ人で宗教はイスラム。他民族の我々はその事をよく勉強せねばならなかった

のです。一週間もかかってやっと海に見える所へ出ました。遠く遙かに水平線があり、ここがインド洋でした。この地で終戦まで作戦に従事したのです。

目的はシンガポール防衛、即ち北スマトラのメダン石油を防衛することにあつたのです。また英国インド洋艦隊の行動を探知するのが目的でもありました。そして英艦隊が肉眼で見える距離まで接近してきたこともありました。

八月十五日終戦

日本降伏のデマ放送が乱舞していたのでした。私達の信号室では、あらゆる通信線で傍受していました。また南方の前線の部隊においても、兵器もその部品の補充もなく、病気との戦いですべてが不利の状態であつたのです。敵機による降伏ビラがばらまかれる。流言飛語は各所に乱れ飛びました。

インドネシア軍に参加の誘惑が各部隊へ伝わ

る。我が部隊は部隊長以下、祖国の土をふむまでは行動を共にする方針が一貫していて逃亡兵はいませんでした。

終戦後一カ月、北スマトラ中部にあるミズ農園へ移動しました。この農園は日本人の所有で、実に広大で、朝日が畑から出て、夕日がまた畑に入るといふ広さでした。

連合軍の命によりここで武装解除になり、すべての兵器を連合軍に渡しました。その頃戦犯に問われる人が出始めました。これより後、部隊も移動があり、マライ半島行きでした。

これから先はどうなるのか。皆不安な気持ちで、ただもう命令に従うのみでした。

マライ半島クアラランプールに着きました。いよいよ部隊は連合軍への降伏式を行い、検問を受けるのです。

ここは飛行場で暑い。汗が流れる。

直ちに将兵の検問が開始されました。大きい幕舎が色分けられており、ここで一人ずつ検問が始

まるのです。私はこの検問で戦歴と職責の取調べを受け、我が身の白黒、潔白を明確に証明するための一番長い時間でした。検問が終わると汽車に乗り、行先はシンガポールのリババレイのキャンプと呼ばれていた、作業隊でした。南方残留十万人の将兵は身をもって、敗戦国日本の賠償を受けたのである。

部隊指揮者である大隊長が残されたのです。部隊長は最後の別れに「踏まれても 地上の草は根が強い、やがて花咲く 春もある」との歌を残しました。

このキャンプに海軍が九百人、陸軍が八百人程いたとのことで、キャンプ長は英軍の将校で、元日本軍の捕虜であったとのことで、我々をきつく扱いました。恨みをもって、仕打ちを受けたのです。何が紳士の国か！ と思いました。キャンプでは一個分隊単位約二十人で軍律は厳しく、軍隊生活そのまま以上でした。毎朝、英国旗への敬礼

から始まります。時間厳守です。そして作業班毎に出発します。作業内容は破壊された建造物の取り除き、片付け等の重労働でした。

問題は食事で、五、六歳の幼児が食する程の量で、水も一日一升程の配給でした。ここは赤道直下で配給の水一升位一回に飲んでしまいます。実に散々の目に合ったものです。青い草はなんでも食べました。生きるためにはなんでも食べました。水！ 水！ すべてが水を欲しがったものです。

カエル、デンデン虫、ネズミ、ムカデ等で日中温度の高い時に、鉄板の上に置けばすぐ食べられました。食事前には水を飲む、水道は止まる。この苦しさは筆舌に尽くすことはできません。日本へはいつ帰れるやら、たまには他のキャンプの日本兵と情報を交換しました。「ある時、セクターの作業隊で、ゴムの実を食って数人が死んだ」と聞きました。

老兵は栄養失調で死んで行く。各作業場へ行く

ても、日本軍の捕虜兵をまるで野良犬をぶって、追いまくるような有様でした。一日の作業を終えてキャンプへ帰り、皆で話し合い、慰め合い、夜は遠い故郷の父母兄弟の夢を見てお互いに励まし合い、部隊長の別れの言葉を思い出し、二年八カ月のこれらの思い出は語り切れません。

また一生にとって忘れられない思い出は、ある老兵は死の直前二度とこのような思い出は孫子の末までさせまいと言いました。苦しい中にも故郷のなつかしい人にも会いました。

英国軍も一年余りで本国へ帰り、後はインド兵と交替しました。インド兵は「日本人はアジア人種で偉大な民族である。小国で世界を相手に戦った勇士である」と粗末な取扱はしませんでした。作業場で何を食っても知らぬ振り、時にはタバコに火をつけてくれる。友情と同情でキャンプ生活も幾分か解放的になったのです。

光陰は矢の如く、食べ物に慣れる苦しい体験も

すべて経験しました。暑い暑い赤道直下で、今日も作業隊員は長蛇のごとく並んで作業を行い、何の希望もなく、作業に励むだけでした。

終戦後、現地の対日感情はあまり悪くなく、作業場の近くで、新聞にある日本兵の情報を知らせてくれたり、特にインド系、マライ系、中国系、国際都市シンガポールでは好意をもって決して敗戦国日本兵を辱めるようなことはなかったのです。

やがてインドネシアは独立し、英国の植民地は次々と独立したのです。私はアジア人種の団結と感情が国際都市シンガポールで感ぜられました。そして外国にいて祖国の有難味がしみじみと腕の中に脈打ったのでした。

月日のたつのも早かったのですが、若者の体力、気力にも限界がありました。平均年齢二十五〜六歳で、ただ生存しているとしか思えない身体でした。

待望の祖国帰還の道も開かれました。二年八カ月の苦しい思い出は筆舌に尽くせぬ苦しみで、一生忘れることのない労苦の深刻さをもたらしました。

着の身、着のままですレタ軍港へ着きました。

港には一隻の古びた貨物船が接岸していました。

「大安丸」といい、若い商船学校の生徒が航海がてら我々を温かく迎えてくれました。衛生兵の予防注射が終わると、亡き戦友の遺骨を先頭に乗船が続ききました。そしていよいよレタ軍港を後にしました。港外にはレイテ海戦で重傷を負った巡洋艦「高雄」が無惨な姿で巨砲を天に向け、名残りを惜しむかのように我々を見送ってくれます。

さらばシンガポールよ、船は次第に遠ざかって行く。二年八カ月は思い出深い戦場、誰を恨むのでしょうか。

全員甲板上で遠ざかるシンガポールを眺めながら、目から大粒の涙がいつまでも、ただ無言でいました。

昭和二十三年九月末日（？）九州の佐世保へ上陸。二日程して三百円を支給され、約三日間程して故郷の自宅へ復員しました。

結婚は昭和二十四年。子は男ばかり三人、その中次男は航空自衛官二尉の現役でお勤め中。孫、曾孫と皆元気で暮らしています。

私の戦後の略歴は

岩松漁業協同組合監事、理事。

津島町自衛隊父兄会長。

愛媛県自衛隊父兄会理事。

津島町同和对策委員。

津島町老人クラブ理事。

津島町文化財保護審議会委員。

等で現在は老人会等で余生を楽しんでいる。

今日の祖国日本の繁栄の陰に尊い犠牲が多にあったことは忘れてはならない。特に次代を担う若い世代は知って貰いたいと思う。私の方へもある時、小学校五年生が五人来てくれました。戦争

の話をと約一時間熱心に聞き入っていました。もっともつと沢山の青少年が戦争中の労苦に深い関心と興味を持ってほしいと切に望みます。

太平洋戦争は日本は負けた、東南アジアの諸国は独立して植民地から自立した、お互いにアジアの諸国と手を取り合っつていつまでも仲良くしましょう。

最後に先の大戦において護国の鬼となった戦没戦友の御霊に対して御冥福をお祈り申し上げます。

スマトラ

油田地区の警備

千葉県 山内 信次

昭和十五（一九四〇）年三月、千葉県立市川中学を卒業、家業であった土木建築石材業の手伝いをした。父母共に健在で兄弟は男二人、女二人の